子どもの頃の温かい愛情というものはこんなにも長く続くのだ！

～ 高崎の成電工業の基礎は戦争疎開時の運命の出会いにある ～

それは「運命の出会い」であった。太平洋戦争が激しくなる中で、群馬県高崎市に疎開した子供は、お兄ちゃんとも言うべき人に可愛がられていたことをよく覚えていた。知らない土地でいじめられた子供を、体を張って守ったお兄ちゃんは心の拠り所であったのだ。それから多くの歳月が流れて、この２人は意外なところで出会うことになる。

群馬県高崎市に、〈成電工業〉というカンパニーがある。制御盤・動力盤に代表されるパネル設備や、ＬＥＤ照明をはじめとする半導体事業をメーンにするカンパニーであり、実績と信頼に裏打ちされた技術力で、多くの評価を獲得してきている。この会社を創業したのは“瀧澤弘”という人であり、〈東京商船大学〉を出て、タンカーや捕鯨船の船長をしていたが、高崎の実家筋が起こした会社を手伝うことになり、モノづくりの世界にのめり込むことになる。70年以上前のことである。

当初は、群馬県下仁田の名産物であるこんにゃくを製造する機械で基礎を築いた。今日にあって、こんにゃくゼリーで有名な〈マンナンライフ〉も、このこんにゃく製造プロセスを今も使っている。その後、群馬県安中市に東洋一の規模と言われる〈東邦亜鉛〉の精錬会社ができたことで、この亜鉛の生産設備を手がけることになる。こうした基礎を踏まえて、制御盤を作る技術が〈成電工業〉のすべてのベーシックテクノロジーとなっていくのだ。

ようやく会社の基礎が固まりつつあった1970年代後半に、創業者の“瀧澤弘”氏は、〈信越化学〉に営業に行った折に、思わぬ人物と出会うことになる。東京から疎開した３歳年下の子が何と〈信越化学〉の設備部長として頑張っており、まさに抱き合うようにして２人は自分たちの過去を思い、涙し、再会を喜び合った。

そこから〈成電工業〉と〈信越化学〉との深い絆が結ばれることになる。今日にあって、ぶっちぎり世界トップの半導体シリコンウエハーメーカーである〈信越化学〉の信頼を得て、〈成電工業〉は一気に業績を伸ばしていくのだ。その幼馴染の設備部長は人望のある人であり、後には〈信越半導体〉の副社長として陣頭指揮をふるうことになり、昨年まで監査役を務めるほどの人であった。

「創業者である父は、酒を飲むと必ずこの運命の出会いの話になった。２人が手を携えて急成長産業である半導体に貢献する技術を確立していった歴史は、何ものにも代えがたい。子供の頃の温かい愛情というものは、こんなにも長く続くのだ、と感心してしまう。現代のようなイジメ時代にはない美しさがそこにはあったのだ」

こう語るのは、創業家の後を継いだ二代目の代表取締役社長である“瀧澤啓”氏である。瀧澤氏は高崎で生まれ、高校野球やサッカーの名門として知られる前橋育英高校に進み、法政大学・文学部を出て、父の会社に入社する。入社した時の印象は「何とまあ、真面目で固い会社であることか」というものであった。しかしながら数年働いた頃には、会社の中に流れている心の温かさというものに気が付いた。それは、まさに父が作った最大の遺産であったのだ。お互いがお互いを支え合う心の絆が会社を作っていく。そしてまた、それはお得意先にもつながっていく。

「〈マンナンライフ〉が経営クライシスに陥った時には、すべての取引業者が手を引いていった。しかして、我が社はずっと設備の供給を続けた。〈マンナンライフ〉の創業者は、このことを決して忘れていなかった。だから今日現在にあっても、創業者である会長は、製造設備はどうあっても常に〈成電工業〉に発注しろ、と言ってくれる。こんなにありがたいことはない」（瀧澤啓氏）